不変と革新
～長寿経営に向けて～
事業をつなぐ

野原グループ（東京都新宿区）

建設ＤＸ、変化の先を読む

1598年創業の野原グループ（東京都新宿区、野原弘輔社長）は、経済の流れに合わせて変革を繰り返してきた。綿問屋や金物店を経て戦後は建材商社に事業転換。現在は建設産業のデジタル変革（ＤＸ）に取り組む。野原社長は「正しいと思うことをやる。時代の変化の先を行き、変化をつくるのが会社のミッション」と語る。

創業の地は長野県飯田市。江戸時代に人口が増え人々の暮らしが豊かになると、酒やしょうゆの製造・販売で事業を拡大。明治時代後期から昭和にかけてクギや鍋、ガラス、セメントと商材を変えてきた。

第二次世界大戦の影響で事業は停滞し、1947年には飯田市が大火に見舞われ会社は大半の資材を失った。現社長の野原弘輔氏の曽祖父である野原弘一氏は、おいの達也氏と長男の弘吉氏（弘輔氏の祖父）に事業を承継。同年、東京に進出し野原産業（現野原グループ）を設立した。

戦後復興の波に乗り建材商社としてゼネコンや施工会社に商品を供給。創業メンバーが市場を開拓し、内装材料や住宅メーカー向け建設資材の販売、サッシ工事などに事業分野を広げてきた。「自分たちが見える限りの社会の変化を捉えた」（野原社長）結果だ。

転換期は弘輔氏が野原ホールディングス（現野原グループ）社長に就任した18年以降。アナログ手法が主流だった建設プロセスにデジタル技術を導入。３次元（３Ｄ）建築情報の「ＢＩＭ」設計・製造・施工支援プラットフォーム（基盤）「ビルドアップ」を中心とした建設ＤＸ推進事業を21年に開始した。

弘輔社長が大切にする言葉は「最も強いものが生き残るのではない。最も変化に敏感なものが生き残る」。古い自社を壊し、変化の先を読み順応する。あらゆるゼネコン現場でビルドアップが活用される将来を思い描く。

日用品や金物などの初売りで撮影された記念写真。前列は経営層（野原産業　飯田営業所、1951年）

【企業メモ】安土桃山時代の慶長３年に創業し、約420年にわたり業態を変遷してきた。現在は建設産業のデジタル化をビジネスの軸に、生産性を向上し社会課題の解決を図る。25年には内装仕上げ工事向け新サービスの商用提供を始めた。

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社